

**「親ばなれ子ばなれ」に着目した知的障害のある子の「親なき後」支援の質的分析****—エピソード記述法による関係性再構成の探究—**

○ 日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科 氏名 松本和剛 (009372)

キーワード：親ばなれ子ばなれ、知的障害、エピソード記述法

**1. 研究目的**

本研究は、知的障害のある子をもつ親たちが「親なき後」に備えて継続的に取り組んできた地域実践の中で生成される親・子・支援者の関係性の変容を、「親ばなれ子ばなれ」に着目して、エピソード記述法により質的に明らかにすることを目的とする。「親ばなれ子ばなれ」という概念を単なる空間的な分離や制度的な準備ではなく関係性の再構成として捉え直し、親の語りや本人の表現にどのような意味のずれや葛藤が含まれているのか、またそれにどのように支援者が応答し得るのかを考察の対象とする。従来の自立支援論では十分に扱われてこなかった関係性の生成・変容の過程そのものを中心に据えることで、支援の倫理的構造や制度的対応の課題を浮き彫りにする。

**2. 研究の視点および方法**

「親ばなれ子ばなれ」という関係性の再構成プロセスに着目し、本研究では、日本の地方都市A市において2023年より継続的に開催されている「親なき後」を主題とした実践グループをフィールドとし、親・子・支援者の語りと関係性の変容を分析対象とした。研究者自身がこの実践に参加し、学習会・研修会・座談会・運営会議・非公式な会話の場に同席し、参与観察・音声記録・逐語化・アンケート集計・フィールドノート等を通じて資料を収集した。方法論的には、鯨岡峻（2005）のエピソード記述法を用いた。これは「背景」「エピソード」「メタ意味」の三層から構成され、語りの関係的・文脈的意味を記述的に再構成する質的手法である。特定の語りがいかなる状況で、いかなる他者との関係性において生成されたのかを描写し、その背後にある構造や意味のゆらぎを読み解く。

**3. 倫理的配慮**

本研究は、日本福祉大学大学院「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認（承認番号：23-046）を得た上で実施した。なお、利益相反（COI）はない。

**4. 研究結果**

本研究では、10件のエピソード（以下：EP）をエピソード記述法に基づいて分析し、「親なき後」に備える地域実践の中で、親・子・支援者の関係性がどのように変容していくのかを明らかにした。当初は制度的・経済的備えを重視していた親たちが、実践を重ねる中で関係性そのものへの関心へと変化していった。たとえば、ある母親は「子どもに幸せになってほしいと思っていたけど最近は『私も幸せになっていい』と思えるようになった」と語った（EP1）。この語りは、母親が自己犠牲的役割から距離を取り、自己の幸福を肯定することで親役割の再定義が始まりつつあることを示唆していた（MM1）。また本人の「大丈夫」という語りが、表面的には自己決定として受け止められながら、実際には「そう言

わざるを得ない」関係性の中で発せられていた (EP2)。このような語りの構造は、支援現場において内的な揺らぎや支援の必要性が看過される危険性を孕んでいた (MM2)。制度に関しては、「制度があると聞いてもうちの子が本当に助かるかは別」という語り (EP3) から、制度の存在と本人の実感の間に生じる乖離が浮き彫りになった。このズレは、制度が関係性のなかで再解釈される必要性を提起していた (MM3)。WAONカードを活用した金銭管理の実践では、母親と支援者が協働しながら本人の生活状況を把握しており (EP4)、家族と支援者の関係性が、役割分担を超えた相互的ケアとして再構築されていた (MM4)。さらに、「支援する人も支えられる人も両方であることが必要」という語り (EP5) は、固定的な支援観を相対化し、支援関係の双方向性に関する意識の広がりを示していた (MM5)。「困っていても来られない人はたくさんいる」という声 (EP6~8) は、情報や制度に対するアクセスの不平等性が実践の語りを通じて浮かび上がるものであり、支援構造の課題を内包していた (MM6~8)。父親の不在と母親の共感的沈黙が共有されたエピソード (EP9) では、「うちもそう」と語り合う中で、語られなさに潜むジェンダー化されたケアの偏在が立ち現れていた (MM9)。また、「制度を学ぶことよりもそのあと誰と話せるかの方が大事」という語り (EP10) は、支援の本質が制度の整備そのものではなく制度を媒介とした関係性の構築にあることを指し示していた (MM10)。

このように、それぞれの語りは単なる出来事の記述にとどまらず、親・子・支援者の関係性が再構成されていく契機を描き出していた。「親ばなれ子ばなれ」とは、空間的・制度的分離ではなく、関係性を揺らぎの中で再構築していく過程である。そして、支援の応答性と実効性は、制度そのものの整備に加えて「いかなる関係性において語りが可能となるか」という支援構造の質にこそ根ざしていることが本研究により明らかとなった。

## 5. 考察

本研究は、「親ばなれ子ばなれ」を親・子・支援者の関係性の再構成として捉え、語りの中に関係性が生成される瞬間を見出した。Stern (2004) の関係生成理論に基づけば、「私も幸せになっていい」という語りは、固定された親役割を揺るがす契機であり、関係性が動的に再構築される場面である。松本 (2025a) はこうした語りを支配的権力の再編成と位置づけ、子の主体性を高める関係的変容として理論化しており、結果と一致する。また、制度の整備が安心感に直結しないという語りは、制度の意味が関係性の中で再定義されることを示す。この点に関し松本 (2025b) は、制度的支援や説明があっても家族や本人の実感と一致しない場合があることを明らかにしている。語られないこと (沈黙) や父親の不在といった現象は、Weingarten (1991) が指摘する「語りを許す関係性」の不在として理解され、その背後には支援の非対称性やジェンダー規範がある。Gilligan (1982) の応答的倫理の視点からは、語りをどう聴き、どう応答するかが支援の質と関係性の変容を左右する。したがって、「親なき後」支援の実効性は、制度整備に加え、関係性を基盤とする支援の構築に依拠することが本研究により示された。